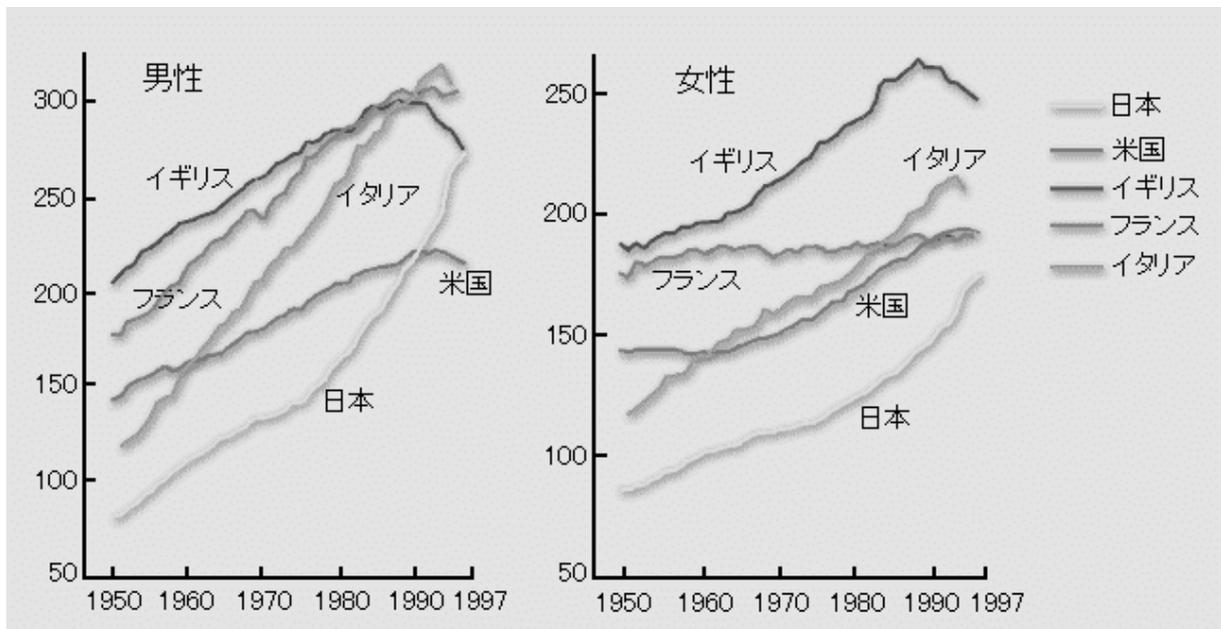


乳がん検診の必要性和意義

乳がんの罹患者数および死亡者数は増加の一途をたどり、現在年間の罹患者数は約4万人で女性がんの第一位です。欧米諸国では1970年代に検診にマンモグラフィーを導入し、受診率は70-80%を超える状況であり、1990年頃から乳がんによる死亡率が減少してきています。これはひとえに乳がんに対する薬物療法の向上もありますが、検診による早期乳がんの発見も要因の一つと思われます。日本の検診はマンモグラフィーの導入が欧米より30年遅れたこと、受診率が10%台できわめて低いことなどにより死亡率の増加に歯止めをかけられていません。

日本で初めてがんに特化された法律として「がん対策基本法」が成立し、2007年4月から実施されています。その中には、「国民はがん検診を受けるように努めなければならない」と明記されています。また、国のがん対策推進基本計画の中には、「10年以内に75歳未満のがん死亡率20%減」、「乳がんなどの検診受診率を5年以内に50%以上に」と記載されています。

このことから乳がん検診を受診し、早期発見により乳がん死を減らすことは重要とされます。



主要各国におけるがん死亡率の年次推移 (WHO Mortality Database より)

乳がん検診方法と発見率

日本では 2000 年に 50 歳以上の女性にマンモグラフィー併用検診が導入され、2004 年には 40 歳以上に拡大されました。その結果、2005 年の成績では、マンモグラフィー併用による乳がんの発見率は 0.27% で、視触診 (0.14%) の 2 倍となり、早期乳がんの発見率は従来 of 視触診検診の 50 ~ 70% に向上しています。また、日本において乳がんの罹患率が高い 40 歳代を対象に超音波併用乳がん検診の有効性を確認する試験も現在進行中です。